

No.1 「人類文明の転換点」

西暦2000年代、地球上の重要な生物種が他の全ての生物種を道連れにして急速に絶滅へ向かっている。人類である。人類は他の生物にはない「自然を改造できる能力」によって地球上の優先種としての地位に君臨してきた。人類がこの地上に現れたのは200万年前である。35億年の地球の生物史に比べればほんの一瞬にすぎない4000年程度の歴史時代からこの人類の持つ「改造能力」は発展しつづけ、200年前の産業革命にいたってその頂点に達した。1800年代後半から始まった産業革命は局地的な改造が全地球的規模に広がる重要な転機でもあった。これを支えたものが化石燃料の発見によるエネルギー革命(外部動力の利用)である。

35億年前、地球上に現れた生命が多様な進化を遂げながら30億年以上の年月をかけて、営々として封じ込めてきた化石エネルギーを解放することによって、人類の「改造能力」は重大な転換点に行き着いたといえるだろう。人類は化石燃料を燃焼することで莫大なエネルギーを手にする一方で地球の大気組成をも改造し始めたのである。また、その「改造能力」一技術革新によって作り出した膨大な種類の人工合成化学物質は地球の循環システムでは処理できず、地球的規模で拡散蓄積し、人類を含めた多くの生物種の生存を危機的状況に追いこんでいる。

この主な原因は物質的繁栄のみをひたすら追い求めてきた近代文明にある。一方この文明はこの地球上を人類のみのものとする傲慢な思想に支えられて発展してきたのである。この傲慢な思想は人類内部にも同様に作用している。民族、宗教、国など自らの属する組織に執着し他を排除する思想であり、個人的には自己のみの繁栄をはかる精神である。

人類は多くの技術革新により、自然の圧力からの死亡率を減少させ、生物種としての寿命を延ばしてきた。現在起こりつつある人口爆発はその当然の結果である。しかし、この地球という惑星が許容できる生物量は有限であり、増加する人口にも限界がある。

今日、重大なのは人口と同様に人類がその「改造能力」によって追求してきた物質文明が地球の許容量の限界に達しようとしていることである。1800年代初めまでは地球の許容量が人類の経済発展を充分収容できたが、1900年代後半になって、市場経済システムが地球の循環システムと矛盾し始めたのである。それは人類の物質的欲望の達成を目標とする市場経済システムが資本を基礎に構築されていることに起因する。蓄積された膨大な資本は更なる拡大を求めて、市場経済圏を徘徊する。そこには地球の許容量を考慮する余地はない。元々資本は利潤を求め、自己の拡大を志向するものだからである。

このまま人類が現在の文明を推し進めれば、21世紀には地球史上かつてなかつ

た転換点に到達することは確実である。転換点とは引き返さうる時点ではなく、破局点であることが重大である。

「われわれは子孫になにをのこすのか」*2000/04/05 EN

——私の答えは、簡単です。地球。自然と言いかえてもかまいません。人間の生命が維持できて、それぞれが快適にその生涯を終えうる生態系を持った地球を、次代にのこす、ということです。そのことにただ一つ必要なことは、抑制だけでしょう。なにをどう抑制するのか、となると、残念ながら、私の意見は具体性を帯びなくなります。

十六の話 「訴えるべき相手がないまま」